

氏名：平野 稔也(青年海外協力隊)

滞在国：タンザニア

職種：理学療法士

タイトル：ザンジバル日記(Habari za Zanzibar)17

ザンジバルと野球 「ザンジバルと野球②」

ザンジバルといえば野球！と思ってしまうぐらい私はこの2年間でザンジバル野球に関わることができました。しかし、ザンジバルでは野球はまだ誰も知らないスポーツです。そんな無名スポーツを普及するにあたっては多くの方々の協力があってこそであって、私たちだけの力だけではできなかったことばかりでした。そういう意味では幸せな2年間でもありました。



さて、本題ですがこの長い間、野球に関わることができた要因に「ザンジバルの子供達」がいます。どんな時も野球の普及という目的の傍ら、子供達の関わりがとても大きな財産となりました。そんな子供達が野球に何を求めるか？

「なんかいいことがあるんじゃないか」「なんか貰えるかもしれない」「他のスポーツでは活躍できないしとりあえずやってみるか」

これらの答え、全てが選手たちの本音の声でもあります。しかし、きっかけはなんでも良い気がします。彼らの目に映る私たち、野球というスポーツはまだそういった状況である事実は変わりません。しかし、その目に映るものが次第に変わっていく様子も

この2年間でみることもできました。スポーツで大切なことは一番になること！もそうですが、スポーツを通して得られる成長やスポーツマンシップのあり方、ルールを守るなどもその一つに挙げられます。

スポーツを介して得られる成長と人との新たな出会いが選手の思いを変え、行動を変え、最終的には未来を変えていく可能性があります。もちろん、それは近い未来の話ではないですが、その可能性をスポーツという分野が与えてくれる恩恵だと思っています。

それと同時に、それらが私たちをも変えてくれます。選手は私たち以上に今の外国にいる私の立ち位置を教えてください。うまくいかないことの多くが、等身大の

私でない私が犯した過ちだったりすることもありました。逆に、楽しいことや驚きも選手が運んでくれました。宗教への考え方、生活感、生きていく知恵の多さ。学ぶこともとても多い2年間でした。





選手たちはボランティアとして関わった私たちが帰った後も、野球を続けることができます。しかし、私たちが関わったのは長くても彼らの人生のたった2年間でしかありません。どこまでどれだけのことが伝えられたかはわかりません。それでも、私なりにそこにいた事実とそこで感じあった感覚は共に残り、お互いの人生の糧になればと思っています。

最後に野球に関わってくれた選手たち、コーチみんなに対して感謝を伝えたいと思います。

ありがとう



次が最後

日本のニュースを見ると日本がとても暑そうに感じます。そして、帰った時にどんなギャップが待ち構えているのか、不安になる一方楽しみでもあります。

さて、次回が本当に最後ですね。今回は“ザンジバルと野球”についてお話ししましたので、次回は“活動(ボランティア)について”まとめられればと思っています。

最後までよろしくお願いします!!